

ラムダの教科書 1

津軽海峡交流圏ラムダ作戦会議編

いつまで
勉強すれば
いいのよ!!



目次

- 1 まえがき
- 2 第1部 ラムダ委員の活動紹介
- 18 第2部 ラムダ委員と学生の座談会
- 27 編集後記

津軽海峡交流圏ラムダ作戦会議

令和3年に世界文化遺産登録された「北海道・北東北の縄文遺跡群」が双方のエリアを一つの文化圏とみなしたように、津軽海峡は遙か昔から青森県と北海道を結ぶ架け橋になってきました。青函連絡船が行き来した時代を経て、平成28年には北海道新幹線が開業。迎えた時代の節目とともに、青森県では津軽海峡を挟んだ道南地域までを一つの圏域とする「津軽海峡交流圏」の形成に向けて、平成25年度から「λ(ラムダ)プロジェクト」に取り組んでいます。

プロジェクト名の「λ(ラムダ)」は、新函館北斗駅から新青森駅を通り八戸駅へと至る新幹線ルートと、新青森駅から弘前駅へと続く奥羽本線ルートを合わせた形が、ギリシャ文字のλ(ラムダ)に似ていることに由来。要所となる青森市、弘前市、八戸市、さらには青森県内4つ目の新幹線駅・奥津軽いまべつ駅周辺地域、下北地域などを含めた青森県全域と、道南地域との交流促進を目指しています。

プロジェクトの核になる「青森県津軽海峡交流圏ラムダ作戦会議」は、平成25年度から28年度までの4年間、青森県にゆかりある委員が参画し、圏域内の活性化や圏域外からの交流人口増加などを目的としながら活動を進めてきました。平成29年度からは新たに北海道からも委員が選出され、「津軽海峡交流圏ラムダ作戦会議」として連携を強化。過去の事例にとらわれない様々な提案とともに委員自らがあらたな流れを生み、先頭に立って行動する中、津軽海峡交流圏の輪が広がっています。



津軽海峡交流圏ラムダ作戦会議ホームページ

<https://www.pref.aomori.lg.jp/soshiki/kikaku/kotsu/ramudasakusenkaigi.html>



まえがき

この冊子は、津軽海峡交流圏ラムダ作戦会議メンバーの活動を紹介するものです。

ラムダ作戦会議では当初、北海道新幹線開業に向けた活動提案集を発表していました。この提案を考えるなかで、一緒にやると面白そうなアイデアがどんどん生まれ、多くのアイデアが実行に移されてきました。

ラムダの活動も約10年となり、「自ら汗をかく」だけでなく、私たちの経験を次の世代に伝えたいという想いが出てきました。「教科書」という硬いタイトルがついていますが、これは決して私たちを手本にしてほしいということではなく、こんなことをやると楽しそうだ、こんなこともやっていいんだ、自分たちでも何かできそうだ、などと考えるきっかけにしてもらいたいという想いを込めています。

一人一人の活動は限られていても、互いにつながり、津軽海峡交流圏を舞台に活動することで新しい面白い活動が生まれてきます。ぜひ皆さんも一緒に津軽海峡交流圏を盛り上げてみませんか。

1

みつや
三津谷 あゆみフリープランナー
出身：函館市、居住地：青森市

活動紹介

函館市出身の私は、結婚を機に青森市に移住しました。函館も青森もさほど変わらないと思っていたのですが、実際に住んでみると、違うところがたくさんあって、毎日が楽しくて仕方ない！ 10年以上たった今でもその気持ちは変わっていません。

発足当時より津軽海峡交流圏ラムダ会議に参加していますが、その頃は知り合いもおらず、緊張しながら会議に出席したのも今は良き思い出。委員として北海道新幹線開業前のPR動画製作、イベントの企画や参加などに関わってきました。

ラムダ会議に参加することがきっかけで、2015年より津軽海峡マグロ女子会のメンバー（マグ女）になりましたが、その活動の中で学んだのは、「理屈をこねるより、まずやってみる」こと。種をまかなければ花は咲かない。具体的に動くことで、たとえ失敗しても確実に前進できます。理論より実践、小さなことでも大きなことでも、いろいろ挑戦することが大事だと思っています。



マグ女みんなで北海道新幹線開業をモーレッツPR！



委員として函館のイベントで北海道新幹線のPRを実施

結婚して青森に来てから、夫にならって海のごみ拾いを始めまし



だが、最近は環境問題への関心がより高まり、散歩を兼ねたごみ拾いが日課になっています。三方を海に囲まれた青森県では、マグロやホタテなど海の恵みをいただいている分、海を大事にすることが必要だと思います。マグ女の仲間とごみ拾いをする機会も増えましたが、津軽海峡交流圏でもその必要性を共有し、みんなで「具体的な行動」ができればと願っています。



コロナ禍の中、マグ女でオンラインイベントに挑戦



最近は海に限らず、マチでも毎日ごみ拾い！



下北マグ女とごみ拾いとヨガのイベントを実施

プロフィール

大学卒業後、障がい者・高齢者向け旅行・イベントの企画や会員向け情報誌の編集等を行う。函館にUターン後、派遣添乗員として年間約200日添乗。結婚を機に青森市に移住、青森県の素晴らしさやポテンシャルを実感、あわせて海のゴミ拾いを続ける。環境問題への関心が高まり、2020年2月にしまんと新聞ばっぐインストラクター養成講座修了。2013年度より(青森県)津軽海峡交流圏ラムダ作戦会議委員。2015年より津軽海峡マグロ女子会に加入。2020年より青森市廃棄物減量等推進審議会公募委員。



2

いとう いちひろ
伊藤 一弘

一般社団法人かなぎ元気村 代表理事
出身・居住地：五所川原市金木町



活動紹介

津軽海峡交流圏ラムダ作戦会議には、発足当時から委員として参加しています。この中においては、産業振興チームの一員として津軽海峡圏ウェルネス博の企画やプログラムに参加してきました。また、情報発信チームと連携し、「おうちであおもり冬景色」などにも積極的に参加しました。

青森県五所川原市金木町に生まれ、これまでに商工会による地域振興やNPO法人による文化保護活動を展開して来ました。この中において道南江差町とは民謡文化を通じた深い交流があり、下北半



津軽海峡圏ウェルネス博 眺望山トレイル

島を加えた三半島交流が今でも活発に続いています。特に互いの共通資源や文化による「津軽海峡ひびサミット」と「津軽海峡交流圏郷土芸能祭」を6年間にわたり三半島の輪番で開催してきたことは大きな成果です。



スノーシュートレイルで冬も元気に！ 青森ヒバの御神木からパワーチャージ



コロナ禍の社会において世界的にヘルスツーリズムへの関心が高まっており、今や旅行形態が個人型にシフトしたことによる顧客ニーズの変化や、青森



県が短命県ワースト1の不名誉から脱出するために「健康」をキーワードとした社会活動をラムダ会議を軸にして広げたいと思っています。

どの地域においても担い手不足が深刻で、持続が危ぶまれています。ボランティアではなく、新しい産業としてヘルスツーリズムが地域に根付くことを願っています。



チーム合同による「パル」スタイル津軽海峡ケンミン交流ラムダパーティー（八戸市）



津軽海峡交流圏郷土芸能祭
（五所川原市金木町）

プロフィール

地元信用金庫25年と金木商工会事務局長18年でキャリアを終了。在任中、市町村合併に危機感を覚え、NPO法人かなぎ元気倶楽部を設立して「ローカリズム」を提唱する。太宰文学と津軽三味線だけではなく、郷土の魅力を深掘りし、プロモーション活動を展開するために「太宰ミュージアム」のまちづくりを推進。2012年より健康をキーワードにしたヘルスツーリズムに目を向け、津軽半島の自然や生活文化を体験する多様なプログラムを開発。2018年より一般社団法人かなぎ元気村代表理事を務める。

ホームページ <https://kanagi-genkimura.org/>

Facebook

かなぎ元気村 <https://www.facebook.com/kadarube/>

奥津軽トレイル倶楽部 <https://www.facebook.com/okutsugarutrail/>



HP



かなぎ元気村



奥津軽トレイル
倶楽部



3

やま うち ふみ こ
山内 史子

紀行作家
出身：青森市、居住地：東京都杉並区



活動紹介

青森県の半島北部や道南を旅する際、つい気になってしまうのが海の向こうの眺め。曇天や雪景色の先に微かに見えるだけでもなんとなく嬉しく、稜線がくっきり見通せるようなお天気にも恵まれれば、ご機嫌で反対側に手を振りたくなくなります。

すぐそこにある（ように思える）なら行ってみようかと、一步踏み出したくなるのが人間の性ではないでしょうか。実際、「北海道・北東北の縄文遺跡群」が一つの文化圏として世界文化遺産に登録されたように、古代から人々は津軽海峡を行き来してきました。やがて時は過ぎ、明治時代末期の青函連絡船開業以降はより多くの人や物が動くようになり、さらに北海道新幹線開通後はその距離感がぐっと縮まっています。

各種メディアで津軽海峡交流圏の魅力を発信するために各地を訪れて美味美酒をたらふく味わい、ラムダ委員の皆さまとあちらこちらで乾杯を重ねるうちに気づいたのは、海峡を介した隣人同士の“ふつう”が似ているようでときどきちょっと違う……という興味深い事実です。長い歳月をかけた交流により慣わしが共有され、なにかのきっかけで独自の進化を遂げたのでしょう。たとえば、津軽のごく一部の地域にしか残っていない方言と似た言葉を江差で耳にしたことがあります。ニシンの切り込みは見た目には変わらないのに、道南では甘味が立っていました。旨くて酒が進むのは、ともに同じ。

とにもかくにも巡るたびにになにかしらの発見があり、探求の道は尽きません。皆さまもぜひ、津軽海峡交流圏を旅してみてください。もしかしたら縄文人にまでつながるかもしれないわたしたちのご先祖が培ってきた、海を挟んだご近所づきあいの足跡が、意外なところで見つかるかもしれません。自分自身もまたさ



らなる往復に励み、毎日の暮らしの中に埋もれた宝探しを続けたいと思っています。今、もっとも気になっているのは、道南から岩木山が見えるという噂。海を越えた先の山の頂を前に、縄文人はなにを思ったのか。過去に想いを飛ばしてひとり妄想しながら、来たるべき日を楽しみにしています。



マギUROとともにロンドンへ



ラムダの活動を通し、
青森の美酒をご紹介



函館駅前「津軽屋食堂」にて、
リアル津軽海峡交流圏に酔う

プロフィール

英国ペンギン・ブックス社勤務の後に独立。国内全都道府県、海外40カ国をこれまで歩いてきた。昼は史跡や物語の舞台に立つ自分に、夜はその地の美酒に酔うのが生きがい。著書に「英国ファンタジーをめぐるロンドン散歩」(小学館)、「赤毛のアンの島へ」(白泉社)、「ニッポン『酒』の旅」(洋泉社)など。日本銀行広報誌「にちぎん」の連載「地域の底力」では、各地のまちづくりを紹介。



4

そと い あ き
外 井 亜 希

NPO法人おいらせ自然楽校 代表理事
青森アクティビティーズ 代表
出身：北海道、居住地：おいらせ町



活動紹介

北海道出身。父系母系共に、先祖が青森県から渡ってきた開拓民であり、年少時から年に一度、岩木山の近くにある猿賀神社にお参りに来ていたことから、私のルーツは青森にあるとずっと感じていました。津軽海峡交流圏ラムダ作戦会議では、津軽海峡圏縄文ウェルネス博でパンフレット作成の取りまとめなどの事務局などで関わっていく中で、方言などの言葉、文化、食も、私の故郷である余市と同じものが青森にあることに気がつき、縄文時代からの交流圏が確かにあったのだと実感し、その面白さを感じるとともにその楽しみ方をもっと広めていけたらと考えています。今後は北海道出身であることを活かし、北海道から青森に至る一そ



大人も子どもも楽しめる



オンライン青森夏まつりでのなりきり縄文人イベント



多彩なプログラムが楽しめるウェルネス博



して北海道へと双方を渡り歩く交流圏イベント・ツアーの楽しさが周知され、当たり前のように売れていく、商品として追隨されるような未来を実現できると嬉しいです。今後も自ら動き、楽しさを発信したいと思っています。



青く澄んだ森で遊ぶ解放感



ウェルネス博プログラムでの縄文火起こし



かんたんお手軽大冒険



家族でスノーDayキャンプ

プロフィール

小学校での特別支援員、小・中学校での夢の授業講師経験、保育士としての実務経験を経てNPO法人おいらせ自然楽校を主宰し、親子の森の遊びの場づくりを行ってきた。森の中でコーチング・カウンセリングを行い最高の目的を設定、その目的に向けて実現可能な短期目標・行動計画を策定することで達成を実現する「奥入瀬・十和田リトリートプログラム」を行っている。

関連ホームページ

おいらせ自然楽校（おいらせもりのようちえん）

<https://oirasemori.com/>

森の中でコーチング☆奥入瀬・十和田リトリートプログラム

<https://forestcoach.hp.peraichi.com/>



おいらせ自然楽校



奥入瀬・十和田リトリートプログラム



5

たかぎ
高木 まゆみ

株式会社また旅くらぶ 代表取締役
出身：今別町、居住地：青森市



活動紹介

私の出身地である今別町に北海道新幹線奥津軽いまべつ駅が平成28年3月に開業。その3年前に（青森県）津軽海峡交流圏ラムダ作戦会議が発足しました。

堅苦しい会議とは違い自由に発言ができる雰囲気の中でいろんな話題やアイデアが飛び交い刺激を受けています。

この出会いがさらに、津軽海峡マグロ女子会の誕生につながっています。

平成20年から着地型観光に取り組み、青森県と道南地域（津軽海峡交流圏）のツアーを企画しています。

ネタの多くは、地域の皆さんがやってみたいと考えた内容が多いのですが、それをやる機会をつくろうと思ったのが旅行業をはじめるきっかけでした。



開業直前の奥津軽いまべつ駅前（2016年）



荒馬の里ぶどう園（今別町）



北海道新幹線開業直前PRキャラバン（2016年）



実は旅行業そのものに興味があったわけではなく、一番は人の魅力でした。

この圏域には自慢したい人たちがたくさん暮らしています。来てくれた人も、地元の皆さんも、みんな嬉しそうで、その場面に立ち合えることが、この仕事にハマった理由です。



イネ子の畑から（中泊町）

特に大事にしたいのは、ここで暮らしている人たちに喜んでもらえるかどうかです。

嬉しい気持ちは、目に見えなくてもちゃんと相手に伝わります。だから“また会いたい”という気持ちで来てくれるのだと。

有名な観光地でなくても、会いたい人が増えて何度も行き来したくなる関係人口をこれからも増やしていきたいと思っています。



マギユロウと県広報番組に出演



函館マグ女とコラボした「函館コンクリート物語」ツアー

プロフィール

平成20年から、地域の暮らしや生活文化を紹介するツアーを企画。来訪者も地元の人も感動を分かち合う着地型観光に取り組み、平成23年に「また旅くらぶ」を設立、代表取締役を務める。

関連ホームページ <https://matatabi-club.com/>



6

きむら さとし
木村 聡

八戸せんべい汁研究所 所長
出身・居住地 八戸市



活動紹介

◎ラムダ作戦会議での活動

平成27年 津軽海峡交流圏公開生バトルIN函館 レアなご当地グルメ対決青森代表

令和2年 津軽海峡ケンミン交流ラムダParty主催 その他多数

◎青森県をどう思う？

青森県は、自然・食・祭り、そして人の魅力にあふれている。

でも、そんな地域は全国にたくさんあるのです。

青森らしさをしっかり伝えて（誇って）、「行ってみたい・あの人に会いたい・また行きたい」と感じてくれるファン・リピーターをもっと増やして、持続可能な地域にしたい。



汁*研が始めた「B-1グランプリ」



津軽海峡ケンミン交流ラムダParty

◎若者にメッセージを

どんな小さな町や村にでも、必ず地域を元気にできる「宝物」があります。

新しく作るより、まずは今あるもの・かつてあったものを活かして、つまり宝の原石を見つけて、その魅せ方や売り方を変えてみることから始めてみませんか？

ぜひ「自分ができるまちおこし」にチャレンジしてみてください。



◎座右の銘

「まちおこしに、終わりなし」

「【天才】は【努力する者】に勝てず、努力するものは【楽しむ者】には勝てない」

◎地域を元気にするためにしていることや考え方は？

地域を元気にするのは、そこで暮らしている地元の人。

誰かがやるのではなく、まず自分ができることを始めること。

◎今後のビジョンは？

引き続き、まちの活性化のための活動を続けること。

青森県のどの地域でも、そこで暮らす人は「そこに一生住み続けたい」と思い、地元以外の人には「一度そこに行ってみよう」となり、実際に来てくれたら次は「あの人に会いにまた行きたい」と感じ、最後は「そこに住んでみたい」と思ってもらえるような「選ばれ続ける地域」になることを目指したい。



オンラインで「八戸ブイベース」をPR



八戸名物の朝市に「(左から)イカドン、マギューロウ、イカール星人」3ショットを企画

プロフィール

平成15年に仲間と「八戸せんべい汁研究所(汁*研/じるけん)」を設立して、せんべい屋でも飲食店でもない普通の市民が、ボランティアで取り組むまちおこし活動をスタート。「八戸せんべい汁」のイメージソングの制作など様々な活動をして、平成18年に「B-1グランプリ」を発売し第一回大会を八戸市で開催。2012年の第7回大会において「汁*研」がゴールドグランプリ(全国第一位)を受賞し、「八戸せんべい汁」は全国区になった。その後も活動を続け、汁*研は今年(令和5年)20周年を迎える。

関連ホームページ <https://www.senbei-jiru.com/>



7

しま
島 やす
康 子Yプロジェクト株式会社 代表取締役
出身・居住地：大間町

活動紹介

本州最北端・大間町のまちおこしゲリラです。行政区の区割りでいくと大間町は青森県ですが、ここでの生活感覚からいくと、大間町は明らかに北海道。まちおこしゲリラ活動の歩みは、この縦割り行政区との戦いの歩みでもあります。「津軽海峡交流圏」が「津軽海峡県」になったっていいべさ！と吠え続けている過激派委員です。

青森県大間町を北海道たらしめているのは、大間と函館を結ぶ津軽海峡フェリー。私がガキだった昭和40年代は、「国道フェリー」と呼ばれ物流や観光の大動脈だった全盛期。埠頭の赤灯台が遊び場で、港にフェリーが入ってくるたび乗船客に手を振っておりました。2000年、その原風景を復活させたのが、大漁旗での「旗振りウェルカム」。2008年に航路廃止問題が浮上してからはなお、海に開かれた町を守る運動の象徴として続けてきました。

全盛時代の船名「大函（だいかん）丸」を復刻させて、新フェリーが誕生した



初めての「旗振りウェルカム活動」（2000年）

2013年。私自身もまちおこしゲリラ活動を株式会社化して、本気の観光まちづくりに突入。翌年には、津軽海峡交流圏で泳ぎ続ける同志とともに「津軽海峡マグロ女子会」を立ち上げ、海をつなぐ女たちのまちおこしが始まりました。北海道新幹線という大動脈だけでなく、小さ



な町村にまでお客さんが来てくれる毛細血管を通そう！と、「寄り道旅」をプロデュース。マグ女の志は関門海峡にも飛び火して、「フク女」の誕生に。海がつながる、人がつながるからこそ実現できる価値を、まだまだ形にしていきます。

そして今、未来に希望をつないでいくために、新しい時代の海の町を切り拓いていく子どもらに、まちおこしゲリラ魂をモーレツ注入中。



新フェリー「大函丸」誕生 (2013年)



マグ女監修の駅弁「津軽海峡にぐさがな弁当」(2016年)



青函デスティネーションキャンペーンの盛り上げ (2016年)



日本財団 海と日本プロジェクト：アゲ魚っ子キャンペーン (2022年)

プロフィール

高校入学と同時にふるさとを離れ、都会暮らしを経験。1998年にUターンし覚醒。大間がNHK連続テレビ小説「私の青空」の舞台となったことをきっかけに、2000年「あおぞら組」を結成し、まちおこしゲリラとなる。2013年、あおぞら組の収益部門を独立させ、Yプロジェクト(株)を設立。2014年、海をつないで泳ぎ続ける女たちと「津軽海峡マグロ女子会」を立ち上げた。

関連ホームページ <https://yproject.co.jp/about-yakko/>



8

むろ や もと お
室谷 元男

江差いにしえ資源研究会 会長
出身・居住地：江差町



活動紹介

私の住む、江差町は北海道の中でも歴史の古い町です。江戸時代より日本海を往復する北前船の終着地として、本州との交易で栄えました。住民の多くの祖先は能登半島や津軽半島から渡ってきました。

私の転機は昭和61年に行われた、淡路島から江差まで日本海を北上した北前船の大回航事業でした。この回航により、江差の歴史を生かす町づくりが始まり、その後全国の半島地域づくりに参加し津軽や下北半島との関わりが深くなりました。渡島・津軽・下北の三半島交流で「ヒバと北前船」「郷土芸能交流」を佐井村、五所川原市金木町と、持ち回りで開催。互いの地域の歴史や文化を知りあう大きな機会になったと思っています。海でつながる津軽海峡交流圏はまだまだ交流が少なく互いに知らないことがたくさんあります。コロナ禍の今、遠くの他人より近くの親戚（みたいな友人）関係がより一層深まれば良いな～と思っています。厳しい風土から生まれた祭りや郷土芸能は地域の誇りです。

次世代の津軽海峡交流圏人には、足下の魅力（財産）を発掘し交流が深まることを期待します。





渡島・津軽・下北の三半島連携でのヒバの植樹
(江差町)



渡島・津軽・下北の三半島連携での郷土芸能祭
(佐井村)



マグロ女子会企画、着物で町歩き
(江差町)



渡島・津軽・下北の三半島連携での郷土芸能祭
(五所川原市金木町)



江差の春を彩る花嫁行列

プロフィール

平成元年、北海道戦略プロジェクト「歴史を生かす町づくり」のモデル地区に指定され、商店街組合が結成され初代理事長に就任、商店街活動や地域づくりを開始。国交省の半島地域づくりに参加し全国の半島地域との連携を深める。特に津軽海峡圏の渡島・津軽・下北の三半島との交流では「ヒバと北前船」をテーマにそれぞれ持ち回りで3年間交流。その後テーマを「郷土芸能祭」として3年間開催。現在は商店街組合の理事長を交代し江差いにしえ資源研究会の会長。



第2部 学生、ラムダ委員に迫る！

～ラムダ委員と学生の座談会レポート～*

グループ



インタビューアー：北山創一朗さん

(北海道教育大学函館校)

参加者：伊藤一弘さん、木谷敏雄さん、春井満広さん（以上、ラムダ委員）、武藤一郎さん、大西達也さん（以上、アドバイザー）

Q 津軽海峡交流圏（青森県や道南）を拠点として活動していることについて。

結論から言ってしまうと、津軽海峡交流圏を愛し、津軽海峡交流圏をこれからも発展へと導いていこうと思っているからこそ、ここを拠点に活動をしているということであった。ラムダ委員は決して津軽海峡交流圏内出身の方々だけではない。圏外出身の方もいれば、北海道、道北地域の方々もいた。もともとは、各地元にいたのに、なぜ津軽海峡交流圏に魅力を感じたのか。それは、自身が展開する活動や企業の職務に従事するにあたって、「津軽海峡交流圏にしかない」魅力が発見できたからである。

なかには、津軽海峡交流圏に特別熱い想いをぶつける委員がいる。縄文ウェルネス博を展開する委員だ。自身が青森出身でふるさとをツーリズムで復活させていきたいから、またラムダ委員を通じてアクションとしてやるのが大切、活かせる場ができるからこそ活動に従事し続けるという。この地域の他とちがうところはとずばり聞くと、「各地の意見が生まれてくる、広がりが出てくる」と答えた。心を洗濯することが目的の縄文ウェルネス博は、海外の活動を参考に取入れたものだ。もともと短命県であった青森を再生することを目的に開始したこの活動は、今ではすっかり全国からやってくるお客様を始め大きな刺激を与え続

* 第2部は2022年11月9日に行われたラムダ委員と学生の座談会の内容を、参加学生がレポート形式でまとめたものとなっています。



け、医療とは違った形での「健康」を提供している。

また、第3セクター鉄道会社に所属するラムダ委員は次のように語る。「開拓された北海道。函館は青森によっている。第3セクター鉄道としてノウハウを得られる。交流が大事であって交流できることが誇りである。やりとりが形となっていくことが素晴らしい。」

それぞれの想いを胸に、交差する津軽海峡交流圏はまだまだ新しい価値と魅力の創出を目指しており、ここを拠点に活動を続けていきたいというラムダ委員の強い想いが伝わってきた。

Q ラムダ委員同士が集まって活動することによって実現できたことや一緒に活動することの良さについて。

様々な取組みをする中で、貴重な意見交換や新たな知見が広がったということが挙げられる。というのは、自身の専門領域だけでなく、「交流」をすることで自身の活動や思想、知見に刺激を受けている委員が多かったからである。ラムダ作戦会議は団体の長や企業の社員等、様々な立場の方々方が在籍するが、普段自分たちの知見だけで活動を行うことが多かったものの、この会議を通じて異なる視点を手に入れたという。たとえば、ウェルネス博は、4年間行ってきたが、この活動を続けてきて、青森が地元ではないラムダ委員の方に体験してもらうことで、貴重な意見が得られることもあった。

「交流がもっとできそうな雰囲気が出てきた。地域でのつながりや、活動を継続させることが大切」と語る委員がいた。出身地域こそ違うものの、一体感を出すことに意義があると感じている委員が多い。

また、ウェルネス博は、運動、休養、栄養の3つの健康要素を整えながら行う活動であるのだが、このうちグルメな委員が語ったのは「地元のお酒や、それと組み合わせるおつまみもおいしくて、、、」ということであった。普段地元の方が組み合わせることのないお酒とおつまみの採択をしていくこともできたらしい。栄養も健康要素であるこの取組みは、心の健康にも影響してきており、食を楽しみながらの新たな知見の獲得にもつながっていた。



以上のように「自身の常識にとらわれず」「現地に赴いて」「他者や他地域を理解し」「それをさらに活用できる方法についてともに考える」ことが可能になっていた。一人では不可能なものを可能にしたのはラムダ作戦会議の強みであるとメンバーは確信している。



Q これからの活動と、若い世代に対して伝えたいと思うことについて。

地元の産物を活かした活動の推進と若者の力の創出が必要と感じているという。特に若者の関心を集めることは至上命題であるとされる。たとえば、ウェルネス博は、心身共に心が和らぐ素晴らしい活動であったが、この魅力に若者は気がつけるだろうか。今のままではほとんど気づいていないと思われる。ウェルネス博には、経済波及効果があるのか、などといった根本的議論の本質なども含めて慎重に検討する必要がある。そこで、まずは勢いのある若者に盛り上げてもらうというのが合理的だと考えている。盛り上げるためにはまず現地へ若者に赴いてもらう必要があるため、その施策を考えるのが大人の責任である。ここで言う「若者に赴いてもらう」とは、「その地域を好きになってもらうこと」と同義であり、地域を好きになってもらう施策を考えることもまた大人たちの責任だということであった。

また、若者のSNS利用にも注目している。若者は近年Instagram、Twitter等のSNSを頻繁に利用している。数人の若者が現地を訪れ、そこでSNSを利用し拡散をするとさらなる波及効果が期待できる。これをラムダ委員は「アンテナ張って拡散する」と表現している。いわゆるインスタ映え等を狙うには、映えスポット等の設置を行う必要があり、その環境整備をしていくことも現地が抱える課題である。そこを訪れてみようという意識をいかに持たせるか、それが、これからどのように活動を発展させていきたいかという問いの大きな鍵である。日頃から現地に来てもらう努力をしていきたいと、ラムダ委員は語る。



グループ2



インタビューアー：松田 滯さん（弘前大学人文社会科学部）

参加者：外井亜希さん、三津谷あゆみさん、山内史子さん、
森 樹男さん（以上、ラムダ委員）、飛弾則雄さん
（アドバイザー）、氣田直樹さん（オブザーバー）

Q 津軽海峡交流圏（青森県や道南）を拠点として活動していることについて。

ラムダ委員の一人は、津軽海峡交流圏で活動している理由は函館出身ということもあってもともと縁があった。函館に住んでいたときは青森と函館はあまり変わらないと思っていたが、青森に来てからは青森の魅力をすごく感じている。特にとても衝撃を受けたのが食文化で、たとえば、函館では食べない菊を食べていることなど、青森はおいしいものがたくさんあることだと語ってくれた。また、方言についても衝撃で、函館は下北の言葉と似てると言われることがあるが、津軽弁とはまた別で同じ県内いろいろな言葉があることが魅力。故郷の函館にも貢献できることが津軽海峡交流圏で活動する良さであると感じているという。

また別の委員に津軽海峡交流圏で活動する理由を聞くと、祖先が青森から来たという人や、アイヌの人たちが使っていた言葉が青森にもあるという部分につながりを感じていて、私のルーツが青森にもあるのかなと感じ、この会議がすごく面白いからと語ってくれた。

Q ラムダ委員同士が集まって活動することによって実現できたことや一緒に活動することの良さについて。

一緒に活動することで実現できたことは北海道新幹線開業時のPR動画。動画の最後にはりんご娘にも踊ってもらって委員全員がつながってこういうことができるのはすごく面白かった。

また一緒に活動する良さは、人と力を合わせると一人ではできないことがたくさんできるし、一人で巻き込めない人も巻き込むことができる。これは、長年



やってきているという点も影響していると思う。

さらに、ラムダの委員の皆さんは「じゃあやろう」となるまでの話がとても早い。また、自ら汗をかく精神がみんなの中にあって言われなくても実践しているようなメンバーばかりだと語ってくれた。そして自分がラムダ会議に入った時はまちおこしとかの分野のそうそうたるメンバーばかりで函館から来たばかりの頃だったというもあり、緊張感があったが徐々になじんでいきいまでは気軽に発言させてもらっているという。

また別の委員も北海道出身であるが、北海道もおいしい食べ物が多いけれども青森も野菜などおいしい食べ物が多いことが魅力だと感じていると語ってくれた。そして、この会議に参加している人が皆さん何かしらの個性的ですごい特技を持っていて一つ一つのアイデアが普通じゃないから何を言っても必ず面白いことが起こるといふ。

Q これからの活動と、若い世代に対して伝えたいと思うことについて。

これから発展させていくというよりも続けていくことが大事だと思っているという。つまり、継続させることが新しく始めるよりも大変だと思っている。たとえばマグロ女子会の毎年秋のイベントもコロナの影響で2年ほどできていないなど、継続は難しい部分がある。ただ、私たちは諦めていない。今はリハビリ期間と捉えて少し休んでまた、羽ばたいていこうと思っているという。

また、個人的には1000日を目標に毎日ゴミ拾いをしてSNSにアップする活動をしているという。この活動は、量や場所にこだわらずとにかく毎日やるというチャレンジで、吹雪とか正直行きたくない日でも行っている。この活動はすごく反響があって函館やすずきのでやってくれる人も増えてきている。なので、このような姿を自分が見せることで若い世代の方にも何か感じてもらえたらと思っている。先生みたいな感じではなく、自然な私の姿



で感じ取ってもらいたいという。ただ、写真を撮り続けるというのも結構面倒くさいとこのラムダ委員は付け加えた。

さらにラムダ委員の方はみんなそうだと思うが、多分失敗を恐れてないのではないか。むしろ何か実行した結果で出てきたものをみんなで楽しんでいるように感じているという。

また別の委員は、コロナになって会議がオンラインになったので今はないが、ほんとは酔っ払い話からいろいろアイデアが生まれていったという。

若い世代はダイバーシティとかサステナビリティといった価値観が当然の世代で、学ばなくても理解している世代だと考えている。なので、そういった世代がこの冊子に関わっているのはそれを生かす良い機会である。また、デジタルコンテンツが生活の中にある世代でもあるので、若い世代の人たちにはとてもアドバンテージがあると思っている。そこにダイバーシティなどを取り込むことは若い世代の人たちが関わっているからこそできることであると思っている、と若い世代とラムダ委員と一緒に活動することで新しい活動が生まれる可能性について語ってくれた。



グループ3



インタビューア－：中嶋優翔さん（北海道教育大学函館校）

参加者：後藤清安さん、紺野洋紀さん、奥平 理さん（以上、ラムダ委員）、神 重則さん（オブザーバー代理）

Q 津軽海峡交流圏（青森県や道南）を拠点として活動していることについて。

初めのテーマではラムダがなぜ青森県、道南地域といった津軽海峡交流圏を基盤にしているのかについて、理由や魅力について話し合われた。

そこで委員の方々から様々なお話を伺ったが、津軽海峡交流圏について共通しておっしゃられたことは歴史的に青森、道南地域は連携が深いということである。青森県と道南地域は津軽海峡という海に間を隔てられているもののその交流関係は古く、歴史を辿ると発掘された遺跡、土偶の類似点などから縄文時代まで遡ることができるようである。当時は船を使用し互いが地元で手に入られない品々の交換が活発に行われていたが、現代では学生同士の交流や2016年に開業した北海道新幹線（新青森～新函館北斗）を始めとした交通網の発達による影響、さらに浅虫温泉と湯の川温泉、未完成となってしまった大間線、戸井線といった観光資源の共通点などからより強固なものとなっている。以上のように津軽海峡に隔たれ一見交流が薄いように思われるが、青森・道南地域は歴史的に交流が深くさらに共通の観光資源が存在するため、ラムダは同区域を交流圏に置いているようである。

次にラムダの魅力であるが、ラムダの委員には様々な地域、役職に就いている人が所属しているため、交流を通して普段見慣れている景色や地域に秘められている歴史的な事柄といった教科書には載っていないディープな情報を手に入れることができる。

さらに津軽海峡を泳ぐイルカ、鬼伝説といった青森県内に暮らしていてもその地域に住んでいないと知らない、地域外の情報を得られるところが大きな魅力となっている。またこれらの情報は自分の知的な好奇心を操られるだけではなく、地



域振興にも生かされる。地域を発展させていくためにはその地域にお金を落としてもらわなければならないが、その一つ的手段として地元の名産品を加工した商品の販売などがある。現代では物価の高騰によって商品に付加価値が必要になってくるが、その付加価値として背景や歴史を含めて販売することでより魅力的な商品になっていくようである。このように交流を通して地域の多様な情報・知識を得られるところも大きな魅力となっている。

Q ラムダ委員同士が集まって活動することによって実現できたことや一緒に活動することの良さについて。

2つ目のテーマでは、ラムダ委員同士が集まって活動することによって実現できたことや一緒に活動することの良さについて話し合われた。実現できたことに関しては、コロナ禍の中での活動が挙げられた。2020年頃から蔓延した新型コロナウイルスの影響はラムダの活動にも大きく及び、当初予定されていた全ての活動が制限されてしまうという事態に陥った。しかしこのような厳しい制限下におかれた中でも、何もしないのではなく、オンラインを通して活動が実現できた。この成果は熱意を持った人々が集まったからこそできたものであり、一緒に活動することの良さの一つとも言える。

また一緒に活動することに関しては他にネットワークの構築によるメリットが挙げられる。上述したようにラムダ委員には様々な役職に就いている人が所属しているため、活動の中で沢山の意見交換、交流が行われる。その結果、商売に関しては人々との交流を通して様々な商品を購入することが可能になり、これまで以上に商売の幅が広がっていくことや、意見交換を通して自分の知らない知識・



情報を得ることができ、地元の魅力に関する自分の手札を増やすことにもつながられている。

加えてこうした魅力を宣伝していくためにも、このような意見交換を通して情報や手札を増やしておくことは重要であり、その効果は観光客に満足度の向上といった地域振興にも好影響を与えるものとなってくる。



Q これからの活動と、若い世代に対して伝えたいと思うことについて。

最後のテーマでは、これからどのように活動を発展させたいか、また日頃の活動から若い世代に対して伝えたいことが話し合われた。ここでは活動の発展可能性として北海道新幹線の札幌延伸が挙げられた。新幹線開業後はこれまで津軽海峡交流圏から遠く離れていた札幌も時間的に身近な場所になり、より大きな経済圏の拡大や利用客の増加が見込まれている。しかし、途中駅となる青森、道南も人々が降りてまでも行ってみたいという程の魅力の発信がなければ通過されてしまう恐れがある。

このようなことを回避するためにも全国への魅力の発信が必要となるが、この情報発信の大切さが若い世代に伝えたいこととして挙げた。近年は身近な人が発信することで親和性、信用性が高いことから、テレビの情報よりもSNSが信用され、一人一人が情報発信をする放送局のような立場になってきている。一方で関西、九州といった西日本地域では、東北地方は食、文化といった情報が得られないために未開の地と捉えられており、東北地方が旅行先に選ばれない状況になっている。

青森県にはりんごやねぶた祭りといったメジャーなもの以外にも、酸ヶ湯、不老死温泉、下風呂温泉などといった多数の温泉が点在している他、普段当たり前前に思っている自然の景色も非日常を求めて旅に出たい都会の人々にとっては非常に興味をそそられるものになっている。新幹線札幌延伸後、未開の地と思われる東北地方を知ってもらい、より多くの人に訪れてもらうためにも、SNSを多用する若者世代を中心に魅力の発信が必要であると伝えられた。



編集後記



森 樹男
(ラムダ作戦会議議長、弘前大学人文社会科学部教授)



山内 史子
(ラムダ作戦会議委員、紀行作家、編集後記編集担当)



奥平 理
(ラムダ作戦会議委員、北海道教育大学函館校准教授)



大西 達也
(ラムダ作戦会議アドバイザー、日本スポーツ振興センター理事)



中嶋 優翔
(北海道教育大学函館校)



松田 澪
(弘前大学人文社会科学部)

森 樹男 「ラムダの教科書」刊行にあたり、あらためてラムダ作戦会議について考えてみたいと思い、編集後記として座談会の場を設けました。まずは以前、会議に参加していただいた学生さんの感想を伺いたいと思いますが、率直なところいかがでしたか。

中嶋優翔 ラムダ委員の方々とご一緒したのは一度だけでしたが、それでも情熱のすごさに驚かされ、地域創生のためには強い想いと能力が必要だということを実感しました。

松田 澪 失敗を恐れることなく、あらたなことに取り組み続けてきた姿勢が印象に残っています。皆さん、何をモチベーションに動いているのだろうとも思いました。

大西達也 私もラムダ委員のエネルギーがどこから湧き上がってくるのか、不思議でならないのですよ。地域やそこに住む人たちのために何かしたい、地域の魅力を広めたい、あるいは、自分たちが楽しく暮らしたいといった強い想いが根底にあるのでしょうか。全国の地域づくりに関わってきた経験からも、ラムダ委員の発する熱量は突出しています。

奥平 理 津軽海峡の対岸、北海道側から見ると……ご存じのように北海道とひと言でいっても広いせいか、郷土のためになにかしら全体で協力してという意識は薄いのではないかと常々感じています。ですから、青森県の皆さんの郷土愛には圧倒されますね。青森出身のうちの学生もそうですが、故郷のことを愛してや

まないのが共通している。

森 ラムダの活動では、それぞれの委員が関わる県内各地や道南をとともに歩いたことで、一緒になにかに取り組もうという一体感やエネルギーが生まれたような気がします。

山内史子 失敗を恐れない姿勢を支えているのは、経験値ですかしら。失敗は成功へのプロセスだと知っているから、くじけることなく前に進める。モチベーションで言うと自分の場合、単純に面白いんですよ。個性あふれる委員の意見や、予測できない行動が。

森 会議中に踊ったり歌ったり、ということもありましたね。青森県の会議の中でもっともゆるいと言われていますが、出席すればいろいろな人と会えて情報交換ができるし、なにかしら計画が生まれて進めていこうと盛り上がる。実際、こんなことができるのかと思うご提案が結構あったものの、結果的にはその多くが実りを生んできました。事務局である青森県企画政策部交通政策課の方々も、一生懸命サポートしてくださっています。

奥平 会議はとにかく発見の連続で、自分自身のひらめきにもつながっていますね。青森は奥が深くて面白い、と思いながら毎回、参加しています。自由度が高く自主的なところが、ほかの会議とは大きく違う。終わった後の夜の部も、大いに盛り上がって楽しいし。

大西 確かに、ラムダの活動からは発見が多いですね。実際に私がそうですが、おそらくほかの委員の方々も、会議の場で新しいアイデアの種が得られたり、新しいことに挑戦するエネルギー、元気をもらえたりしているのでは。それが自分の仕事にも生きてくる。

山内 会議の場から離れて集ったり、新しい企画が生まれたりというケースも多々ありますね。委員同士のつながりが形式的ではなく、とても深いのだと思います。

大西 たとえば「瀬戸内DMO」のような広域連携の仕組みは全国にも見られますが、そのほとんどが協議会や会社のようにきちんとした形態の組織になっています。しかしながら、ラムダ作戦会議の場合は「ラムダの掟」だけで委員が集まり、動き、維持できている。地域創生の好例として研究に値するのではないで

しょうか。「津軽海峡はマンモスの時代から行き来していた、しょっぱい川」と三村申吾青森県知事が話されていましたが、海で地理的に分かれた今も、同じDNAで根っこの部分はつながっているのかもしれませんがね。

森 世界を見渡すと、海峡を挟んだ交流が生まれているところは多いですね。海峡というギャップは交流や物理学的な対流が起きやすく、その流れから新しいアイデアが生まれていくのかなという感じがしています。

山内 私たちはつい現代の感覚で人や物の流れを考えがちですが、昔は陸よりも海を行く方が効率的でしたし、お互いに向こう側が見えるという点において、海峡の距離間はとても興味深いものがありますね。

奥平 道南にとって、青森県は真ん前！海峡を渡ってみたいくなるのは、当たり前感覚だったと思います。今は道南に住んでいるけれどご先祖は青森県から来て、お墓は残っている、というお話もよく聞きます。海峡を越えても故郷への思いを断ち切らず、脈々と受け継ぎながら道南で暮らしている方たちはかなりの数にのぼるのではないのでしょうか。

森 アイヌの方が渡ってきた跡も県内各地に見られますし、太古の昔から海峡を挟んだ交流はごく自然にあったのでしょうか。そう考えると津軽海峡交流圏の中でのラムダ作戦会議の活動は必然なのかもしれませんが、今後に向けた課題があるとすればなんでしょう。

大西 実は、ある自治体の職員研修でラムダ作戦会議を事例研究に取り上げて評価してもらったところ、委員が活動を自分ごとと捉えて自ら実践している点が魅力的であり、新鮮であるといった意見や、地域独自のものを取り上げて活用する、オリジナリティについても評価が高かったですね。一方で、もっと積極的に情報発信すべきではないか、委員が固定化しているので次世代の人材確保が必要ではないか、というご指摘もありました。

山内 ラムダの自由度と、コロナ禍は相反する。発足当初はイベントなどを介して、学生さんを含む一般の方々を巻き込みながら進んでいたように、内部だけでという意識はないので、コロナ禍収束後はあらためて枝葉を広げていくことが今後の課題の一つですね。

大西 コロナ禍で一時は県をまたぐ移動が制限されたものの、一方でマイクロ

ツーリズムが提唱されたことで、ラムダの活動は完全に止まったわけではありませんでした。特に、全国で多くの地域がギブアップしていた時期に、いち早くリモートでイベントを開催した意義は大きかったですね。ラムダ委員は知恵を絞りながらチャレンジを重ねていたし、リモートであっても皆さんが活動にかなりの熱量を込められていたのを覚えています。

森 通常は会議があればそれに紐付いた予算がつき、行政のプログラムに沿った事業計画の中で動いていく流れになりますが、ラムダ作戦会議はそれがないし、考えたことは自分たちで実行して県がバックアップをする。自由に動けるのが魅力ですが、今後それをいかに維持していくのかも大きな課題になりそうですね。

松田 ラムダ作戦会議は10年近く続いているそうですが、そういう長期的な取組みはほかではあまり例がないと聞き、継続の難しさ、大切さを考える機会になりました。

中嶋 人口減少や少子化を考えると、一つの自治体だけではなく、青森県と道南のように離れていても近い感覚にある地域同士の連携を強化して盛り上げていくことが、現在の地方創生において重要な鍵の一つになってくるのではないかと考えています。

奥平 津軽海峡交流圏は昔も今も、お互いに「見える」存在です。見えるからこそ、相手先を見てみたい、知りたいといった好奇心が絶えず生まれ続けていると思います。でもお互いのテレビや新聞などの地域メディアは「都道府県の壁」で遮断されています。この「壁」を打破できるのは、もしかすると私たちラムダでの取組みなのかもしれません。

大西 ラムダ作戦会議は北海道新幹線の新函館北斗駅開業に向けて始まったため交通政策課が担当していますが、観光をはじめ地域の魅力を広く発信していくためには、役所内の枠組みを越える必要があるかもしれません。とにかく、いい意味でゆるく、無尽蔵のエネルギーを持つこの集まりを活用し続けていくことが青森県の未来のためになると確信しています。

森 ラムダ作戦会議は先が読めない、何が起きるかわからない。そういうワクワク感も魅力だと思っています。この先、どのようにラムダの物語が続くのか、楽しみですですね。

津軽海峡交流圏ラムダ作戦会議委員

「λ(ラムダ)プロジェクト」を推進するエンジン役となるのが、青森県と道南地域の民間委員で構成する「津軽海峡交流圏ラムダ作戦会議」です。この会議は、現場で様々な成功事例を生み出し活躍している方々に就任していただいています。委員の方々には、これまでにない新たな視点で、交流圏形成に向けた様々なアイデアを提案していただくようお願いしており、併せて、委員自らが、自らのフィールドで津軽海峡交流圏の形成に向けた活動に取り組んでいただくこととしています。

津軽海峡交流圏ラムダ作戦会議メンバーの掟

- 津軽海峡交流圏を元気にしたいという熱い思いがある
- 前向きである
- 面白いことが好きである
- 自ら汗をかく
- 交流圏形成の頭脳である

λ(ラムダ)プロジェクトシンボルキャラクター

マギュロウ

プロフィール

- ☆出身：青森県
- ☆年齢：ヒミツ
- ☆特技：おへそが光る
- ☆好きな食べ物：おいしいイカ
- ☆チャームポイント：おなかぼっこり



令和4年度津軽海峡交流圏ラムダ作戦会議 委員名簿

■委員 (50音順)

	所 属	職 名	氏 名
1	一般社団法人かなぎ元気村	代表理事	伊藤 一弘
2	北海道旅客鉄道株式会社函館支社	次長(営業)	及川 孝
3	公益社団法人弘前観光コンベンション協会	観光振興課長	小笠原清寿
4	北海道教育大学函館校	准教授	奥平 理
5	株式会社百舌		尾崎 伸行
6	東日本旅客鉄道株式会社盛岡支社 青森営業統括センター	所長	角谷 公博
7	八戸せんべい汁研究所(一般財団法人VISITはちのへ)	所長(事務局次長)	木村 聡
8	株式会社ジェイ・ファイン	代表取締役	木谷 敏雄
9	株式会社あおもりSEIAN	代表取締役	後藤 清安
10	株式会社JR東日本青森商業開発	代表取締役	紺野 洋紀
11	株式会社シンプルウェイ	代表取締役	阪口あき子
12	Yプロジェクト株式会社	代表取締役	島 康子
13	青森県商工会議所連合会	事務局次長	鈴木 匡
14	おいらせ自然楽校	代表理事	外井 亜希
15	株式会社また旅くらぶ	代表取締役	高木まゆみ
16	一般社団法人北海道商工会議所連合会	政策企画部政策 企画課長	立藤 雄大
17	有限会社リンゴミュージック	マネージャー	樋川由佳子
18	道南いさりび鉄道株式会社	経営企画部 企画営業課 担当課長	春井 満広
19	NPO法人ACTY	理事長	町田 直子
20	フリープランナー		三津谷あゆみ
21	江差いにしえ資源研究会	会長	室谷 元男
22	弘前大学人文社会科学部	教授	森 樹男
23	紀行作家		山内 史子
24	縄文DOHNANプロジェクト	代表	山田かおり
25	公益社団法人青森観光コンベンション協会	企画事業課長	油布 幸大

■アドバイザー

	所 属	職 名	氏 名
	独立行政法人日本スポーツ振興センター	理事	大西 達也
	日本銀行青森支店	支店長	武藤 一郎
	日本銀行函館支店	支店長	飛弾 則雄



ラムダの教科書編集委員

森 樹男 (代表)

山内 史子

奥平 理

大西 達也

2023年2月 発行

発行 津軽海峡交流圏ラムダ作戦会議

問合せ先 青森県企画政策部

交通政策課 新幹線・地域交通グループ

電話：017-734-9152

FAX：017-734-8035



Illustration: Yuki Oshima